

ケインズとナイト——奇跡の1921年を考える

滋賀大学・筑波大学名誉教授 酒井 泰弘

1. 本報告の狙い

本報告においては、20世紀の二人の巨人——J.M.ケインズとF.H.ナイト——の所説を比較検討し、両者の異同および残された課題を解明していきたいと思う。

ほぼ同時代人である両人は、「離反、接近、離反、そして再接近」の歴史を残している。とりわけ、1921年という「奇跡の年」に焦点を当て、ケインズの『蓋然性論』とナイトの『リスク、不確実性および利潤』の両著が同時出版された歴史的意義を深く検討していきたい。さらに、1936年出版のケインズ『一般理論』や、1935年出版のナイト『競争の倫理』との関係についても言及するつもりである。

従来においては、ケインズ対マルクス、ケインズ対シュンペーター、ケインズ対ハイエク、ケインズ対フリードマンというような比較研究が圧倒的に優勢であったように思える。私はここに「ケインズ対ナイト」という新しい研究視角を提供することによって、学史・思想史の研究に一層の深みと厚みを加えることを意図している。

2. 詳しい内容——離反と接近の歴史

(1) ケインズの「銀の匙」対 ナイトの「木の匙」——最初は離反

ケインズとナイトは、ほぼ同時代を駆け抜けた大学者である。だが、生まれた国籍や階層が違いうし、生活環境や知的環境が相当に異なっている。

ケインズ(John Maynard Keynes, 1883~1946)は、いわゆる「銀の匙」(silver spoon)を抱いてこの世に誕生した。すなわち、彼は七つの海を支配する大英帝国の爛熟期にエリート家系の子息として誕生し、経済学の世界に「ケインズ革命」(the Keynesian Revolution)を引き起こした。幸か不幸か、彼は第二次大戦前後の(世界に雄飛する実務家としての)激務のために、比較的若く他界している(享年63歳)。大戦後には、世界の覇権はイギリスからアメリカへと移行し、やがては経済学界でも「反革命」の嵐が吹き荒れた。だが、2008年のリーマン危機以後には、経済学界の空気は再び変化し、近時には「ケインズの復活」が声高く叫ばれている。

これに対して、ナイト(Frank H. Knight, 1885~1972)はケインズとは対照的に、「木の匙」(wooden spoon)を持って生まれた。すなわち、世界の中心から程遠いアメリカ中西部の田舎の出身であり、庶民の子として苦学力行のうえで、最後には「シカゴの大長老」(the Grandpa of Chicago)と言われるほどの存在に上り詰めた。彼は象牙の塔の中で生きた孤高の学者であったが、「リスクと不確実性の時代」といわれる現在において、その名声と影響力は広く深くなりつつある。彼は87歳の長寿を全うしたが、晩年の大学勤務がそれほど幸福ではなかったようである。その理由の一つとしては、「鬼弟子」のミルトン・フリードマンが「恩師」の学風に反して、「倫理抜きの市場原理主義」を極端なまでに貫いたためであろうと考えられる。

(2) 最初の接近——ケインズの「蓋然性」対 ナイトの「不確実性」

ケインズとナイトの間には、共通項が案外多い。この点は従来 of 学界において不当に軽視(ときに無視)されてきているので、本報告において詳しく論じようと思う。

結論を先取りすれば、二人はともに先見性と洞察力に富む学者であり、ほぼ同じ時期に「蓋然性」(probability)、「不確実性」(uncertainty)、「複雑性」(complexity)の問題に果敢に取り組んでいる。ケインズは、ケンブリッジ大学においてマーシャル(Alfred Marshall)の直弟子である。その点で元来は生粋の「内弟子」であったものの、後年は師の道を半ば外れた道歩く「鬼弟子」の一面をも持ち合わせていた。

ケインズの第一の主著『蓋然性論』(*A Treatise on Probability*, 1921)は一見難解な著作のために敬遠され気味であるが、第二の主著『雇用、利子および貨幣の一般理論』(*The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936)への「橋渡し作業」をする記念碑的著作である。

ケインズは、そのケンブリッジ大学時代に数学を専攻したことから分かるように、もともと数学・物理系に強い「理系出身」の人である。ところが、その彼がいわゆる「確率」を理系的な概念、すなわち通常の「確率・統計」として客観的に計測可能な概念として取り扱っていないことに注目したい。

この第一の主著の日本語訳について、「確率論」という訳語は余り適当ではないように思われる。ここ権威ある英語辞書 ODE (*Oxford Dictionary of English*)を開けてみよう。

probability

- ①[mass noun] the extent to which something is likely to happen or be the case
- ②[mathematics] the extent to which an event is likely to occur,

measured by the ratio of the favourable cases to the whole number of cases.

平たくいうと、①は広く日常用語の「蓋然性」に該当し、②は狭く数学用語の「確率」に対応する。これは、英語単語と日本語訳語とが「一対一対応」をしていない好例である。この点に注意して、①と②を使い分ける必要がある。

ケインズのプロバビリティ概念が何を意味するかは、第一の主著の最後の頁の最後の章句から鮮明である。注目すべきことに、それは長く詳細な文献目録 (Bibliography) の後に、見事な韻文詩の形式で書かれているのだ。ケインズの生涯を貫く哲学・思想・人生観を表わすと考えてよかろう。

(原文) O False and treacherous Probability,
Enemy of truth, and friend to wickedness;
With whose bleare eyes Opinion learns to see,
Truth's feeble party here, and barrenness.

(拙訳) 「おお、人を欺き人を裏切る蓋然性かな
そは真実の敵、そして悪意の友なり
その霞む眼にて人は意見を醸成するなり
そこに真実の哀れな仲間、そして無残な投影あり」

ケインズのプロバビリティ概念は、このようにユニークなのである。一方において、彼は「サイコロの6の目が出る確率が6分の1」というような「客観的頻度説」を却下する。他方において、彼は各個人の「確率」が個人的・主観的にバラバラであると考えようような「主観的信念説」をも斥ける。彼のとる立場はもっと複雑であり、両者の中間に位置する「第三の道」である。それはいわば「客観的信念説」とも呼べる考え方であり、ある一定の客観的条件の下では、各個人がそう信じるのが一定の客観性を持つような「実務家的判断」に依拠するものである。

ケインズは幾つかの事例研究によって、その新しいプロバビリティ概念を側面から補強しようと試みる。第一の事例は、降雨と雨傘携帯の蓋然性である。人が散歩に出かけるとき、「雨に遭う公算は50%から70%程度でしょう」という予報程度が可能だけで、厳密な数値確率の付与はナンセンスであろう。第二の事例として、「原告の同意なしに、種付け馬を第三者に売却」した場合に、原告の損害額は「得べかりし利益」の推定ということになり、正確な計測は不可能である。

第三の事例として、「美人投票第1弾と損害賠償裁判」の顛末を紹介している。これは「女性写真6000枚の中から、一般読者の投票によって一次選考する。二

次選考は、新聞委嘱のH氏が個別面接によって行う。ご褒美は、ハンサムな貴公子とのデート」というものであった。このとき、トップ当選を果たしながら、最終選考に漏れた女性が損害賠償裁判に訴えた事例が紹介されている。ケインズは美人投票が大変お好きなようであり、第二の主著『一般理論』(1936)の中で、有名な「美人投票第2弾と投機バブル」について言及している。ここでは、各人は自分の好みを離れて人気の「勝ち馬」に乗ろうとする傾向が醸成されるのであり、予想の連鎖とバブルの発生とが大きな問題となる。

要するに、ケインズによれば、プロバビリティは、一般に数値化や相互比較が不可能なことが多い。厳密な「一点確率」よりは、緩やかな「区間確率」のほうが意味がある。さらに、区間さえも判然とせず、新たな情報によって変更される可能性がある。

ケインズが第一の著作を公刊したまさに同じ1921年に、ナイトも同様なテーマの第一の書物『リスク、不確実性および利潤』を出版している。私はこの年を経済学史上の「奇跡の年」の一つであるとみなしたい。

ケインズがマーシャルの内弟子であったのに対して、ナイトはマーシャルの「外弟子」である。ナイトはシカゴ大学での講義の際に、マーシャルの主著『経済学原理』(*The Principles of Economics*, 1890)を携行することを常としていたと聞いている。この点では、ナイトはマーシャルの忠実な「押しかけ弟子」であったと言えよう。

1921年出版のナイトの主著はドイツ語風のゴツゴツした表現で書かれた「難解な書物」である。その中には、「我々の住む世界は変化の世界であり、不確実性の世界である。我々が知っているのは、ほんの少しの部分だけである」という有名な文章がある(原著、109頁)。

ナイトによれば、次の三つの「蓋然的状況」(probability situation)を峻別することが大切である。第一のタイプは「先験的蓋然性」(*a priori probability*)と呼ばれる。ここでは、サイコロの目が出る確率というように、客観的・数学的な「確率」が問題とされ、計測可能なリスクが議論される。第二のタイプは「統計的蓋然性」(*statistical probability*)と称される。この場合でも、各国の男女の平均寿命というように、(第一のタイプと同じく)計測可能で保険処理が可能なリスクが取り扱われる。最も問題なのは第三のタイプであり、「推定、判断」(*estimate, judgment*)と命名されている。第三で扱うリスクは「計測不可能なリスク」(*non-measurable risk*)であり、保険処理が殆ど不可能となる。ナイトはこれを「真の不確実性」(*true uncertainty*)と呼び、それに挑戦するのが(経営者から区別された)企業家独自の役割であり、真の利潤が発生する所以であると力説している。

ナイトのいう「企業家」(*entrepreneur*)は、ケインズ『一般理論』の中の「ア

ニマル・スピリッツ」(animal spirits)の持ち主であり、シュンペーター流の「イノベーション」(innovation)を行う活動的人間である。

(3) 再度の離反——ケインズの「マクロ」対 ナイトの「ミクロ」

1910年代と20年代は、ケインズとナイトが学問的に急接近する時代であった。ところが、1930年代の大恐慌の時代に突入すると、両者の関係は急速に冷え込み、以後1980年代に至るまで再び離反の道を歩むことになった。その最大の理由は、自由主義者のナイトが、ケインズ流のマクロ経済政策を好まなかったからである。

1930年代と40年代は、ケインズ経済学の台頭と繁栄によって象徴される。とくに、アメリカのケインジアンたちは、「蓋然性・不確実性・不安定性」というケインズ本来の立ち位置を忘れて、ひたすらマクロ的裁量政策(財政・金融)の実施に最大の精力を注いだのである。もともと「ミクロ派」のナイトは、「マクロ派」のケインズを厳しく批判した。ところが、実務家のケインズは「柳に風」の姿勢で、ナイトを全く相手にしなかった。そして、1946年には、人々はケインズの早すぎる死に遭遇した。

ナイトはケインズのマクロ主義とは異なり、専ら倫理・公正の立場から、「資本主義の非倫理性」を糾弾したものの、それでも強権的な社会主義システムよりましだ、と考えていた。厳しい倫理観に立つ彼の主張は、第二の主著『競争の倫理』(*The Ethics of Competition*, 1935)の中で明快に述べられている。ナイトは前期シカゴ学派の代表選手だったが、1972年に87歳の天寿を全うした。

1970年代後半から80年代・90年代にかけての時代は、ナイト以後の後期シカゴ学派の台頭と支配によって象徴される。いわゆる(ケインズ経済学に対する)「反革命」の嵐がアメリカの経済学界を席卷するようになった。その中心人物はミルトン・フリードマンと、その弟子ロバート・ルーカスであった。ここでは合理的期待形成の立場に立ち、「マクロのミクロ的基礎」が学界の中心議題となった。ナイト風の倫理主義は全く忘れ去られたために、ナイトは時にフリードマンを「破門」するほど激怒したと伝えられている(宇沢弘文氏による)。

(4) 再度の接近へ——「想定外」の想定と両巨人の復活

「奢れるものは久しからず」という言葉がある。ルーカスは2003年のアメリカ経済学会の会長講演の中で、「マクロ経済学の目的、すなわち深刻な不況の除去という大問題は、今や完全に解決された」と豪語した。

ところが、その5年後の2008年には、「リーマン・ショック」という激震が世界中を駆け巡ったのである。2010年、イギリス女王がこの問題をロンドン大学にて取り上げ、「経済学者は何故予想できなかったのですか。一体何をしていた

たのですか」と激しく詰問した。それ以来、世界の経済学界の潮流は再び変化し、「ケインズに戻れ！」という声が年々大きくなり、今日に至っている。

他方において、我々は「チェルノブイリ原発事故」(1986年4月26日)と「東日本大震災」(2011年3月11日)という未曾有の大事故を経験した。市井人は永らく「原発の安全神話」を信じており、研究者の間においても「原発の経済分析」を行うことはいわばタブーに近いものだった。ところが、かの「3.11」以降においては、学界の空気が一変し、いわば「想定外」を想定する学問の必要性が再認識された。このことより、「ナイト・ルネッサンス」と言われる事態が発生している。

3. ケインズやナイトを超えて——「交響学的社会科学」への遙かな道

ケインズやナイトを比較対照的に論じるとき、いたく感じることもある。それは彼らの「守備範囲」の広さと深さである。狭い専門分野に特化した「普通の経済学者」の枠を遥かに超えており、複眼思考を持ちスケールの大きい「社会科学の巨人」なのだ。

森嶋通夫氏(1923~2004)は晩年、日本社会の将来と社会科学の危機的状況を大変心配しておられた。そして、経済学だけでなく、社会学・教育学・歴史学などを取り混ぜた学際的総合研究の必要性を力説されていた。ケインズやナイトを超え、かつ21世紀に生かす道は、森嶋流の「交響学的社会科学」の構築ではないだろうか考える次第である。

【参考文献】

酒井泰弘(1982)『不確実性の経済学』有斐閣。

同 (2010)『リスクの経済思想』ミネルヴァ書房。

同 (近刊)『J.M.ケインズ対 H.K.ナイト——不確実性の時代を生きる』
ミネルヴァ書房。